## 退職のひとこと

**夢醒めてみれば、、、**

昭和51年の春、私は奈良文化財研究所に入所しました。それまで続いていた複数採用の最後の年でした。小林謙一、巽淳一郎、清水真一の諸氏が同期生でしたが、皆さん私よりも一足早く奈文研を去られました。当時は皆まだ20代の若さで、中でも私は右も左もわきまえない最年少者でしたので、いろいろと面倒をおかけしたことをほろ苦く思い出します。発掘調査も、まだバブルの最末期で、3カ月現場、3,000～4,000㎡ほどが普通で、作業員も15人班の4班体制でした。地元採用の作業員、全60人で、作業長、副作業長、班長4名、2名ずつの副班長とヒエラルキーが整っており、今思えばいろんな意味で凄い活力にあふれた現場だったような気がします。ただ調査員のありようは、私の独断的感想ですが、全般的に余り統率されていない個人主義的行動パターンが色濃かったのではなかったかと、自省をかねて思い起こしています。

私自身は、とにかく訳がわからないままに、無我夢中で過ごしてきたというのが実感です。平城第二調査室から第一へ、そして藤原第一から第二、飛鳥資料館、平城第一と移り、その先は文化庁。6年ぶり奈良に帰還し平城第三から第一に移り藤原へ行き国際遺跡研究室へと経巡り、最後は振り出しの平城でアガリという、むしろめまぐるしい奈文研人生でした。ついに居所定めがたしというところで、いろんなことがありましたが、夢から目覚めてみれば、36年前のあの頃と同じ心象風景の中に佇んでいるかのようです。

もう一度繰り返してみたいかナ？

いや、もう十分ダナ。　　（副所長　井上 和人）

飛鳥資料館で作業する執筆者（1985）